

## 大阪医科大学眼科学教室 小児眼科領域専門教授に就任して

大阪医科大学眼科学教室 小児眼科領域専門教授 菅澤 淳



平成28年11月1日付けで大阪医科大学眼科学教室、小児眼科領域専門教授に就任致しました。昭和54年3月に本学を卒業後、本学眼科に一貫して勤務しております。昭和56年4月より北里大学医学部眼科学教室に1年間、内地留学し神経眼科、弱視・斜視を勉強致しました。今日にいたるまで、弱視斜視領域、神経眼科領域をはじめと致しまして、眼科学の研鑽を積んで参りました。

眼科は眼球とその付属器を扱う分野です。器官としては小さい物ですが、現在は細分化されて、その分野は涙道・涙液疾患、角膜疾患、水晶体疾患、ぶどう膜疾患 網膜・硝子体疾患、緑内障、小児眼科、弱視斜視、神経眼科、眼窩疾患、眼形成、画像診断などに分かれています。しかし互いに関連もしております。眼科医はまず全体的な教育を受けますが、その後は自分の専門分野を待つのが一般的で、それも複数持つ場合があります。私の専門分野は小児眼科の弱視・斜視ですが、神経眼科、画像診断も専門にしております。当科の場合は弱視斜視を専門とする眼科医は関連の強い神経眼科も専門とする事がほとんどです。

弱視は眼鏡などを装用しても視力が不良な状態です。ヒトの視力発達は8歳～10歳で止まると言われており、それまでに視力を発達させる治療が必要となります。当科では視力不良の早期発見のために、高槻市や高槻眼科医会の先生方と協力して保健所で行う3歳半健診に以前より積極的に参加しております。しかし、健診で発見するためには各家庭に配布される視力検査表を使って、家庭で検査して頂く、つまり視力に関心を持って頂くことが第一です。それで異常があった場合は保健所に来て頂くのですが、異常があるのに来られなかったcaseを多数経験しておりま

す。今後も啓蒙活動が大切と痛感しております。弱視の治療は眼鏡装用と弱視眼を使用させることが基本です。弱視眼を使用させるのには、健眼にアイパッチを使用するのが一般的ですが、これは欠点としてコンプライアンスが悪いことや、患児にストレスを与えることや、悪くすれば眼鏡を装用してくれなくなる危険があります。当科では点眼薬を使用した全国でもあまり行っていない弱視治療を導入し、時にはアイパッチとの併用を行い、良い成績を上げております。

斜視に関しましては小児で生ずるものと、眼球運動障害を原因とする成人で生ずるものがあります。小児の斜視は弱視を伴っている場合には、まず弱視治療を行ってから斜視の治療に入るのが一般的です。斜視の治療は眼鏡で行うもの、手術が必要なもの、放置して良いものなど、種類によって異なります。成人で生じたものは、原因を検索し、原因の治療を行う事が第一となります。

弱視斜視と神経眼科は他科との連携が非常に重要です。小児科を始め、小児神経、形成外科、脳神経外科、神経内科、耳鼻咽喉科、内分泌内科、膠原病内科などの先生方と連携をとりながら治療を進めることが多く、今までこれらの先生方にはご協力を頂き、心より感謝致しております。この分野に関しましては当科では以前より専門とする先輩方が多く、私は色々ご指導を受けました。しかし、この分野は全国的に見ますと専門とする眼科医が減少しているのが現状です。私は今後もこの分野の発展に尽くしますとともに、この分野の眼科医を増やすべく、今後も頑張る覚悟でございますので、今までと変わらないご協力と、ご指導、ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。